書　評

鳥羽欽一郎著

『日本の流通革新』

——小売業百年の歴史と企業者活動——

安岡重明

1

鳥羽欽一郎氏が日本の小売業百年の歴史と企業者活動を中心にして，『日本の流通革新』（日本経済新聞社，1979年）という著書を刊行された。たいへん喜ばしいことである。著者が「あとがき」でのべているように，日本の近代（明治以降の）商業史，とくに小売業に関しては，適切な通史がなかった。今回，アメリカの経済史・経営史を主として専攻としてこられた著者が，日本商業史研究の欠陥を補う大事業にとりくまれたことに大いに敬意を表したい。同時にわれわれ日本の経済史・経営史を専攻する者は反省して，鳥羽氏のこの著書をわれわれに対する叱責であると受けとめねばならないのではないか，と思う。

まずかんたんに，章別構成を紹介することからはじめよう。

まえがき
第一章　社会変化と小売業——革新を起こすものは何か——
第二章　革新は外的刺戟にはじまった——明治・大正初期——
第三章　中産階級の登場と小売業の変化——大正末・昭和初期——
第四章　よみがえった商人魂——昭和戦後期——
第五章　小売業はどこへゆく——新しい業界再編成のために——
あとがき，参考文献

以上の章別構成は著者の小売業についての基本的な把え方をあらわしている。以下著者の考えの基本線を私なりにまとめたい。

著者は，日本の小売業を中進後発型と規定し，それは日本の産業発展の立ちおくれによっており，この条件のもとでは小売業の革新は上からの革新となる，とする。さて著者は，小売市場は一般に，次の諸条件によって変化するという。

1　人口の移動と集中

2　所得水準とその配分

3　ライフスタイルの変化

4　知識水準の向上とコミュニケーション技術の発達

5　不況などによる所得の急激な低下

これらの諸条件はすべて社会的変化の諸側面であり，大きな社会変動のあるときは，つねに小売業革新の機会があるから，明治期は当然この機会を提供した。しかし中小商業者には資力がなく，新知識の導入も困難で，そのため小売業界の革新は，政府主導（例，勧工場）および豪商主導（例，百貨店）の形で展開した。そして革新は条件にめぐまれた東京から地方へ伝播した。

欧州大戦後，新興の中産階級が大量に創出され，かつ労働者階級も増大し，居住者の性格に応じた商店街や公設市場を生み出し，居住区の郊外への拡がりによって，ターミナル・デパートが出現した。都心の伝統的な百貨店も，新しい諸階層の登場によって大衆化路線をとらねばならなくなった。

この時期にはチェーンシステムが導入されはじめ，ボランタリーチェーンは大正12年資生堂が，直営店は菓子の森永が同年に採用した。百貨店では直営のレギュラーチェーンを展開した高島屋の十銭ストアがあったが，一般小売業者の反対によって，自粛を余儀なくされ，昭和12年には百貨店の発展を抑止する百貨店法が成立し，日中事変，太平洋戦争期には小売業は息の根をとめられてしまった。

敗戦後もしばらく停滞していた小売業界は高度成長期に入り，大量消費時代が到来して，都市化が急激に進行して小売業は復活し，革新が進行した。そのうち顕著な現象はスーパー，およびその発展した形態であるビッグストア（量販店）の出現であった。小売の大規模店の出現により一般小売店は団結してこれに対抗し，百貨店とビッグストアの両者を統制するいわゆる「大規模小売店舗法」が制定された（昭和49年３月施行）。

この過程と並行して，中小小売店から専門店チェーンへの発展，クレジット，通信販売の普及がみられ，百貨店もスーパー業界に参入するといった動きがみられた。

そして現在は次のような変化の過程にある。都市の人口増加がとまり，都心から郊外へ市場が分散し，人口の老齢化に伴ってより合理的な購買行動が選ばれ，消費者運動が強くなる。小売業は多様化し，一方では百貨店，チェーンストア，セルフサービスのスーパー，メイルオーダーといった業態の小売店が発展するとともに，このようにして成立した各業態の店舗をひとつの経営に統合した巨大なコングリマリットが発展するだろう。個々の小売業者としては市場構造の変化，技術革新をどう受けとめるかであるが，小売業界全体としては，社会との調和をはからねばならない。

以上本書の概要を紹介した。つぎに本書の長所と問題点についてのべよう。

2

著者は多年，アメリカの小売業の研究に従事し，『シアーズ・ローバック』『ウールワース』など革新的小売業者についての著書を出版しておられるだけあって，日本の小売業について広い視野から，これを把えようとしている。その点はさきに示した五つの小売業の革新条件にもあらわれているが，それらの指摘が本書のなかで具体的に叙述されている。江戸時代に栄えた呉服店の動向，幕藩制解体による商業立地の変革，鉄道と商店街の形成，社会諸階層の変化と小売業の形態変化など，小売業の革新につながる諸条件が広くかつ具体的に叙述されている。しかもたいへん要領よくまとめられているので，わかりやすい。具体的に書かれているのに，小売業の変化の動きが筋道を立ててのべられている。

具体的な叙述に重点がおかれると，全体の流れがつかみにくいということになりやすいが本書はその点を克服している。本書は，平易さと体系的叙述とをたくみに統合しているので，「暗黒世界」といわれている小売業界が一向に暗黒らしくないという印象さえうける。エッセイストとして著名な著者の筆力のゆえであろうか。

私は小売業について無知であるから，あるいは適切な表現ではないかも知れないが，本書の叙述は，理論的な整理をたえず意識しながらなされているという気がする。これは小売業革新の先駆者であるアメリカにおける事態の推移について造詣が深いからであろうか。

以上のような諸点から私は本書から多大の教示を受けたが，一方次のような疑問をもった。

1. 小売業は商品流通の一部門であるから，小売業の流通革新を把えるためには，流通の他の部門，とくに卸売業との関係を明らかにしなくてはならない。著者は，今回は小売業に限定したと書いておられるので，ことさらこういうことを指摘するのは心苦しいが，やはり，ある程度卸売業との関係についてのべてほしかった。メーカーの直営店やスーパーの巨大メーカーとの対抗についてものべておられるのだから，卸売商との関係がまったく叙述されていないのは，なっとくできない。

2. 以上のことは次の点と関係がある。本書は小売業の形態史として非常にすぐれているが，その小売業界に商品を供給する卸商と小売商との関係，いわば商品の供給組織についての問題性の指摘がないため，さきにふれたように日本の流通業界が「国際的な暗黒大陸」(116頁）といわれても，その暗黒性が理解できないという恨みが残る。著者は小売業の生産性の低さだけではなく，卸商の問題性をも指摘しておられるが，それは指摘だけにとどまっている。

3. 望蜀の希望をのべれば，著者のような第一人者に輸入商品の高価格，食肉業界の不透明さなどについても言及してほしかった。

4. 最後に，著者のいう小売業の後発性について。著者は流通革新の激しかったアメリカを念頭においておられるため，日本の小売業（ひいては流通業界）が後発的ということになるのであろうが，英独仏などのヨーロッパの国ぐにの流通業界と較べたとき，どのような位置におかれるのか，という疑問をもった。日本の流通業界の「後発性」は，比較によってより明確になるのではなかろうか。

著者は外からの革新は，日本では中央から地方へ及んでいったが，途上国などでは革新は首都だけに止ってしまって，地方にはなかなか伝播しない，その点日本は「中進的」であるとしておられる。私は日本の「後発性」のなかには，古くから流通機構の確立していた国ぐにと共通する部分もあると思う。その点への配慮が必要であろう。

さて，私は著者にいろいろ注文をつけてきたが，著者の先駆的な業績に対して，これはまさに過大な要望であるというべきであろう。くりかえしていえば，私は本書の試みを高く評価し，著者の勇気に深く敬意を払う。著者が流通史研究の巨峰であるだけに，今後の御活躍を期待して，私の願望をのべたことを許していただきたい。(1980. 4. 17)